

■ ショスタコーヴィチ/交響曲第5番 二短調 Op. 47「革命」

ドミートリイ・ショスタコーヴィチ（1906～1975）の交響曲第5番は、プラウド紙の批判に精神的なダメージを受けたのち、ようやく「批判に対する創造的応答」として世に問うた作品である。社会主義リアリズムを標榜する音楽評論家たちもショスタコーヴィチ＝ハムレット論を唱えた。つまり、個人主義の幻想にとらわれていた知識人＝ハムレットが悲劇的な試練ののち楽観主義に転じ、人々と連帯して自己を超越し、社会主義の理想的なすがたを認識するというプロットだという。しかし、こうした解釈については異説もある。

第1段落はモデラートの序奏で始まる。軍楽隊の小太鼓のようなリズムは曲全体で何度も現れ、統一感をもたらす。アレグロ・ノン・トロppoの主部は変形のソナタ形式。第1主題部が2つの小部分からなり、それぞれが展開部と再現部で重要な役割を果たす。威嚇的なメロディや朗唱風のパッセージなど、突如、新しい楽想が紛れ込む。第2楽章はスケルツォ。第3楽章ラルゴは金管楽器と打楽器のパートが休みとなる。哀感迫る楽想に静かな緊張感がみなぎる。第4楽章は自由なソナタ形式。展開部に自作のプーシキンの詩による《4つのロマンス》の第1曲「復活」の伴奏を引用。原曲は悩める魂が揺れ動きながら新たな輝かしい日を迎えるという歌詞で、これが社会主義リアリズムへの迎合を意味しているのか、それとも、アイロニカルなニュアンスをこめたものなのか。最後に置かれたあまりにも晴れやかなコーダが、謎をいっそう深めている。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、E♭クラリネット、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、スネアドラム、バスドラム、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン、ピアノ・チェレスタ、ハープ、弦五部

※スコア上の表記